

タイトル	『祖国の砂 日本無名詩集』を跡付ける 第一回
著者	石井, 耕; ISHII, Kou
引用	北海学園大学学園論集(177): 1-19
発行日	2018-11-26

『祖国の砂 日本無名詩集』を跡付ける 第一回

石 井 耕

1 はじめに

1-1 筑摩書房編集部編

本稿は、戦中、戦後から高度経済成長期において、人びとがどのように生きてきたのかを考えることを目的としている。その対象として、詩集『祖国の砂 日本無名詩集』の「無名」の人びと、作者たち、詩人たちを選んだ。

戦後から高度経済成長期についての先行研究は数多い。まず、総論として、飯田・清成・小池・玉城・中村・正村（1976）『現代日本経済史』が嚆矢といえよう。さらには、最近の先行研究として、次の研究が挙げられる。井上寿一（2015）『終戦後史 1945-1955』、猪木武徳（2000）『日本の近代7 1955-1972 経済成長の果实』、中村隆英・宮崎正康編（1997）『過渡期としての1950年代』（中村隆英の同じ表題の論文が冒頭にある）、中村正則（2005）『戦後史』、成田龍一（2012）『近現代日本史と歴史学』、野口悠紀雄（2015）『戦後経済史』、橋本寿朗（1995）『戦後の日本経済』、吉川洋（1997）『高度成長』、アンドルー・ゴードン（2013）『日本の200年 新版』、アンドルー・ゴードン編（2001）『歴史としての戦後日本』（原著は1993年）、ジョン・ダワー（2001）『敗北を抱きしめて』（原著は1999年）などがある。

また、各論として、分野ごとの戦後史についても枚挙にいとまない。人びとの生き方についての事例研究にも興味深いものが数多ある。本稿でも参考にした自伝、追悼文集の中に、たくさんの発見がある。あるいは、社史、労働組合史、自治体史にも重要な記述がある。

ここでは、最近の事例研究としては、岩崎・上野・北田・小森・成田編（2009）『戦後日本スタディーズ①「40・50年代」』、『同②「60・70年代」』、栗原・吉見編（2015）『ひとびとの精神史1940年代』、モーリス・スズキ編（2015）『同 1950年代』、栗原編（2015）『同 1960年前後』、東京新聞・中日新聞経済部編（2016）『人びとの戦後経済秘史』、鎌田（2017）『声なき人々の戦後史上・下』などを挙げておきたい。

また、本稿の主題であるサークルや戦後雑誌に関する最近の研究としては、天野（2005）『「つきあい」の戦後史』、中村（2014）『戦後サークル詩論』、宇野田・川口・坂口・鳥羽・中谷・道場

編(2016)『「サークルの時代」を読む』, 福間(2017)『「働く青年」と教養の戦後史』など多くの研究がある。

とくに、本稿の対象とする『祖国の砂 日本無名詩集』に関連の深い、最近の研究としては、上記に含まれている以外に、鳥羽(2010)『1950年代「記録」の時代』, 鳥羽(2011)『「へたくそ詩」再評価のために『祖国の砂』と『京浜の虹』の性格について』, 竹内(2009)『戦後日本, 中野重治という良心』, 竹内(2015)『中野重治と戦後文化運動』, 坪井(2017)『戦後民衆詩を思い出す その一 連載 二十世紀日本語詩を思い出す 23』などがある。しかし、これらは『祖国の砂 日本無名詩集』に関心が寄せられているが、多くは断片的な言及にとどまっている。

なお、筆者は、これまで石井他(2010)『できるかぎりよき本 後編』で『祖国の砂 日本無名詩集』に簡単に言及したことがある。⁽¹⁾

『祖国の砂 日本無名詩集』は、1952年8月10日、筑摩書房編集部編、装幀難波田龍起、発行者古田晃、発行所筑摩書房(文京区台町)、241頁、定価220円(地方売価230円)で出版された。「解説」が秋山清・中野重治(1952年7月14日付け)によって書かれている。明記されていないが、筑摩書房で編集を担当したのは、石井立であった。

『祖国の砂 日本無名詩集』は、『京浜の虹』との対比もあって、最近多くの研究者の関心が寄せられている詩集である。本稿では、この『祖国の砂 日本無名詩集』を詳しく跡付けていきたい。

『祖国の砂 日本無名詩集』の無名の作者たち、詩人たちを跡付ける試みを可能にしたのは、この詩集に「作者紹介」の欄が設けられているからである。その豊富な情報が本稿の手がかりであった。それを手がかりに、人びとがどのように生きてきたのかを探ってみたい。無名の人びとが書きのこした文章、無名の人びとについて書かれた文章を集め、そこから無名の人びとの生き方を探ってみたい。

戦中、戦後から高度経済成長期の人びとの生き方は、決して標準的、類型的ではない。活気と混沌に満ちた時代だったのである。その時代において、一人一人の生き方は多様であり、個性に満ちており、感情を込めて言えば、本詩集の登場人物は魅力的である。

まず、その当時の筑摩書房について概観しておきたい。

筑摩書房は、1952年当時存亡の機にあった。たくさんの良書を出しながら、採算の合う出版ではなかったのである。ゲオルギウ『二十五時』, マーク・ゲイン『ニッポン日記』, 川端康成『千羽鶴』などのベストセラーを出しながらも単発に終わっていた。看板雑誌の『展望』も1951年9月号で休刊した。有名な逸話が、和田芳恵『筑摩書房の三十年』にある。

「竹之内静雄と松田寿は、そのころのある日、一人では煙草を買うことができないので、財布をはたいて銭を合せ、やっと、一箱のゴールデン・バットを買い、「これで二人とも重役な

んだぜ」と、大いに笑い、金策にかけずり廻ったこともある。」

月給も三カ月も欠配になっていたのである。

筑摩書房が持ち直し、息を吹き返したのは、1953年8月からの『島崎藤村集』を皮切りとして出版された『現代日本文学全集』によってであった。それまでは自転車操業のように多くの本を、少ない編集者で出版しつづけていたのである。そうした苦しい中で、『祖国の砂 日本無名詩集』は出版されたのである。

1952年8月に『祖国の砂 日本無名詩集』は刊行されたのだが、どのような経緯であったのだろうか。

まず、難波田龍起の年譜によれば、1954年の項に「この頃装幀を多く手がける」となっている。難波田は1952年から1956年にかけて、石井立の依頼により、筑摩書房の本の装幀を数多く手がけている。『祖国の砂 日本無名詩集』はその一冊であった。

そして、秋山清の『『祖国の砂』と『京浜の虹』』『秋山清著作集』(10巻、初出は1965年8月)によれば、次の通りである(秋山清は『新日本文学』1979年12月号の中野重治追悼号の「「詩」のことばかり」でも同様のことを書いている。)

「詩壇などに知られない人の詩を集めて詩集を出したいという筑摩書房(石井立氏)の相談を受けた中野からの話で、私もそれに協力することになった。編集は私たちの選にまかせるということであり、そこで私たちは同人誌や新日本文学会の周辺にあるサークル誌などから、人と作品を選ぶことになった。集められた雑誌は約150種、多いものは1誌で10冊もあり、全体で3000編くらいの詩の中から、最後に74人、81編を残すこととなったが、人数の予定などがはじめからあったのではなく、詩のテーマと表現技術の、意欲的なもの、新しいと思われるもの、を選んだ結果だったのである。」

と書かれている。発案者は、石井立であった。石井立は1923年生れで、この年29歳であった。⁽²⁾

また、重視したのは、「詩のテーマと表現技術の」「意欲的なもの、新しいと思われるもの」であった。表現技術の要素が入っていることが、秋山の強調したい点である。

掲載した74人の著者に連絡をとり、本名・筆名・本名掲載の可否・生年月日・学歴・略歴・職業・関係誌名・住所を聞いた葉書のアンケートを実施している。「作者紹介」のためである。ガリ版刷りの依頼状を送り、葉書のアンケートの返送先が、筑摩書房の石井立である。⁽³⁾

筆者の手許に、且原純夫を除く全員分のアンケートが遺されている。写真1は井上光晴、谷川雁、石垣りんの返信と、表書きである。⁽⁴⁾

なお、筆名を用いている者についても、他の資料によって、本名が明らかになっている場合は、本稿でも本名を明示したことがある。例えば木暮真人や北本哲三、蛭間裕人である。明らかになっていない場合は、本稿でも本名を掲載していない。



写真1 『祖国の砂 日本無名詩集』の葉書アンケートの一部 石井立所蔵資料

石井立宛での「作者紹介」の葉書のアンケートは、不鮮明なものも多いが、おおむね1952年5-6月の消印となっている。ということは、遅くとも5月はじめには、74人の詩人の詩を掲載することが固まっていたのである。そして、葉書のアンケートを実施したのである。

秋山清は「解説」で、

「ところで、無名詩人とはどういう人たちか。その人々はどこにいたか。それについて私たちは、「無名詩人とは現在有名でない詩人のこと、また無名詩人と呼ばれることを意に介しない詩人のこと」というようにかんがえてみた。

(中略)

したがって私たちが求めようとする詩人たちは同人雑誌の一部、地域的な文学愛好者の雑誌、職場のグループ雑誌や各種の組合の機関誌、その他個人の詩集やアンソロジー等、手に入るものはなるべく戦後すぐのものを求めてここに加えたが、それらのうちの80%くらいまでは、部数もわずかなガリ版刷りのものなかにひそんでいた。」

と書いている。

後述するが、対象とした詩誌・同人誌・機関誌その他主要なものが巻末に列記されているのを見ると、それは全国にまたがっている。全国からガリ版刷りなどのたくさんの詩誌・同人誌・機関誌などを集めたのである。その中から、74人の詩人を選んだのである。

実は、秋山のいうように、「戦後すぐのもの」から対象となっている。例えば『コスモス』での初出であり、『祖国の砂』に掲載された5編の詩を見ると、木原実「渤海附近」(2-2, 1947年8

月、『祖国の砂』では木暮真人名義)、柴村羊五「いっばいの番茶」(3-1, 1948年1月)、清水清「燈台」(15, 1950年2月)、長沢弘泰「東京湾」(13, 1949年12月)、安藤美紀夫「ぼくらは平和投票に参加した」(17, 1950年10月)というように、『コスモス』の休刊もあって、いずれも1950年以前の詩である(なお、2-2や15は『コスモス』の巻・号を示す)。

また、蛭間裕人『小説「遠い壁」のための素描と覚え書き』によると、『祖国の砂』掲載の連絡があったのは、父・染谷格の亡くなった1951年5月31日の直前のことだったようである。通夜の席で、

「比呂志は枝(法)さんに一通の封書を見せた。それは『祖国の砂』という詩集に彼の詩を載せる承諾を求める手紙であった。

「いいだろう。ぜひ、載せてもらい給え。」比呂志は黙ってうなずいた。」

文中の比呂志は、蛭間裕人の本名・染谷洋のことである。枝法は、染谷格の友人で、ドイツ文学者である。

1951年5月31日の直前だとすると、『祖国の砂』の作者紹介の依頼状のおよそ1年前である。そうだとすると、少なくとも一部の詩は、かなり早い時期から掲載が予定されていたことになる。

一方、且原純夫の場合は、作品「瓦をつくる」が掲載されているが、ただ一人だけ作者紹介に出ていない(葉書アンケートの返事がない)。これは、当時広島の峠三吉の詩の集まり「われらの詩の会」にいた且原が、このような形で掲載されることを知らされていなかったことによる。

且原から筑摩書房(石井立)へ宛てた手紙が遺されている。

「(前略)先日、本屋の店頭で、『祖国の砂』をみかけ、めくってみたところ、わたくしの詩がのっているのでお手紙するわけです。これにはつぎのようないきさつがあるのです。私の作品は、秋山清さんが、広島の峠三吉に、広島でいい詩があったら至急送ってくれと依頼されたのですが、私がいっしょに『われらの詩』という詩誌をやっている関係で、私の作品を送ってみると峠がいったのが、それから4、5日たった日のことでした。もう遅いかもしれぬということでした。そのときみたがり印刷の依頼状には、作者の履歴も同封することになっていましたが、峠が言うのには、これは作品が決定してからの依頼状だから、いちおう作品だけ送ってみたほうがよからうとの意見でしたので、意見に従い、秋山さん宛原稿だけ送りました。」

その後、何の連絡もないので、没になったと思っていたところ、本屋でみかけて、びっくりしたという手紙である。且原の詩は駆け込みで決まったようである。なお、且原純夫と石井立は、その後共に仕事をする、きわめて親しい間柄となっていく。このことは後述する。

ここから、蛭間裕人あるいはそれ以前から、且原純夫まで、一年以上かけて徐々に掲載作品が決まっていたのではないかと推測できる。

秋山清によれば、「(中野重治と)二人で三千篇近くのものに目を通したと思う。それぞれに候補作品をえらんで、三度くらいいっしょに最終決定の相談をした」のである。

掲載は決まったのだが、本の刊行まで待たされている作品については、とりあえず『新日本文学』に掲載していくことになったのではないだろうか。『新日本文学』に掲載された作品から選択したのではなく、『祖国の砂』に掲載が決まったが待たされている作品を『新日本文学』に掲載したのである。

1-2 『コスモス』

『祖国の砂』は、『新日本文学』との関係が深いとされ、それは確かだが、そればかりではない。とくに、『コスモス』、その主宰者であり『祖国の砂』の選考・解説をした秋山清は重要な位置づけを占めている。また、『新日本文学』『コスモス』双方に関係していない者も多い。谷川雁は『母音』、『角笛』、『九州文学』の同人であり、石垣りんは作者紹介の関係誌の欄に記載がない。

さて、『コスモス』は、秋山清主宰の雑誌である。1946年4月に創刊された(1次)。1948年10月に12号を刊行して休刊、1949年12月に復刊した(2次)。創刊当時の同人には、秋山清、長谷川七郎、金子光晴、田木繁、壺井繁治、植村諦、小野十三郎、岡本潤、木原実などがいた。1次・2次の編集発行人は秋山清であり、編集委員は、秋山、金子、小野、岡本の4名であった。1次から2次までで、合計19号が刊行されている。新日本文学と重複する詩人も多いが、コスモスだけに執筆している詩人もいる。例えば、清水清、木原実、柴村羊五、瀬下良夫などである。

2次は1950年10月に再び休刊し、1957年5月に再刊(通巻18号)した。しかし、1957年9月(通巻19号)発行後にみたび休刊した。

1962年11月から、東海地区の河合俊郎、吉田欣一らによって復刊した(3次『コスモス』)。最初1-4号(通巻20-23号)は河合俊郎が編集人を務め、5-8号(通巻24-27号)がえのき・たかし、9-20号(通巻28-39号、39号は1969年9月)は吉田欣一が編集人だった。

さらに、1971年5月から4次『コスモス』が刊行された(通巻40号から)。40-43号の編集人は、清水清、村松武司、西杉夫であり、44号から1977年2月の通巻57号まで、清水清が編集発行人であった。58-94号は秋山清が編集発行人に戻り、95-100号は、編集人暮尾淳、発行人秋山清であった。1988年11月、秋山清が84歳で逝去され、1990年10月『コスモス』は101号で終刊を迎える。

前述したように、『祖国の砂』に掲載された詩のうち5編は、『コスモス』が初出である。『コスモス』に掲載された詩人たちと作品について、以下概観する。『祖国の砂』に登場する15人の詩人たちが19号までの『コスモス』に掲載されている。とくに、木原実(木暮真人)は、コスモス雑記も執筆していることから、創刊以来の同人であり、編集の中心人物の一人といえる。15人の作品は、以下の通りである(なお、詩は掲載されていないが、千早耿一郎も同人であった。3次の65年からは、松永浩介も参加している)。

錦米次郎 「新編浦島譚」1-3(第1巻第3号)、1946年9月

- 「眼の歴史」2-2, 1947年8月
「自然について」3-1, 1948年1月
「風」3-3, 1948年5月
「百姓の死」3-4, 1948年10月
「穂づら」第13号 (復刊2次第1号), 1949年12月
「越南は戦う」16, 1950年8月
「能登氏のこと」17, 1950年10月
「人民の眼」18 (再刊第1号) 1957年5月
「銭の村から」19, 1957年9月
- 吉田欣一 「柀」2-1, 1947年5月
木原実 「渤海附近」2-2, 1947年8月, 『祖国の砂』(木暮真人名義)掲載
「中野重治の歌」2-3, 1947年10月
「コスモス雑記」も掲載, 2-3, 2-4, 3-1, 3-3, 13, 14
「近代の停滞——現代詩批判序説——」2-4, 1947年12月
「随筆 農村を歩いて」3-2, 1948年3月
「兵たちの歌ごえ——「新日本詩人」創刊号を読む——」13, 1949年12月,
この号以降は, 「木暮真人」名義となる。
「政治への逃避 詩と政治のつながり(1)」14, 1950年1月
「詩人の敗北 詩と政治のつながり(2)」15, 1950年2月
「戦後」15, 1950年2月
「流行歌と現代詩」18, 1957年5月
「沖縄の抵抗」同上
- 柴村羊五 「いっばいの番茶」3-1, 1948年1月, 『祖国の砂』掲載
清水清 「さようなら, 京都」3-1, 1948年1月
「植村諦氏への手紙」14, 1950年1月
「古い話」15, 1950年2月
「燈台」同上, 『祖国の砂』掲載
「女兵」16, 1950年8月
「買われるのは白い部分——新聞に載った詩」18, 1957年5月
「俗論詩」同上
「時評 詩人のいない詩」19, 1957年9月
「詩人は流行歌が書けない」同上
- 長沢弘泰 「東京湾」13, 1949年12月, 『祖国の砂』掲載
「くぢら」16, 1950年8月

- 「横須賀軍港」17, 1950年10月
「ガス灯」18, 1957年5月
- 吉田美千雄 「五肢晩年」14, 1950年1月
「星辰」15, 1950年2月
「疲労について」16, 1950年8月
「手紙」17, 1950年10月
- 押切順三 「たそがれの保定站」14, 1950年1月
「ある習性について」15, 1950年2月
「恋歌」16, 1950年8月
「律儀もののうた」16, 1950年8月
「歴史」17, 1950年10月
「はがねのことばに」19, 1957年9月
- 瀬下良夫 「お茶をにごすわけにはゆかぬ」14, 1950年1月
「素朴な覚書(1)」15, 1950年2月
「残された恋文」16, 1950年8月
「母の体」16, 1950年8月
「自己満足ということ」17, 1950年10月
- 安藤美紀夫 「ぼくらは平和投票に参加した」17, 1950年10月, 『祖国の砂』掲載
- 大場康二郎 「白い鴉」18, 1957年5月
- 山田今次 「貨車二題」18, 1957年5月
「蝶」19, 1957年9月
- 北本哲三 「点々と白く」「寝すがた」19, 1957年9月
- 高田正七 「砂漠の駱駝」19, 1957年9月
- えのきたかし 「杭 — 不毛地帯8 —」19, 1957年9月
「金城湯池」(コスモス雑記) 19, 1957年9月

1-3 新日本文学と人民文学

『「新日本文学」の60年』には、なかの・しげはるの「嘘と文学と日共臨中」(1951年6月号) および菊池章一の「組織と人間と方法 — 被害者と加害者」(1951年6月号), 関根弘「狼がきた — 現代詩の方向についての感想」(1954年3月号)が掲載されている。これらは、「1950年, 朝鮮戦争を前にしての日本共産党の分裂は, 新日本文学会とその運動にも深刻な影響を及ぼした。分裂の多数派(所感派)が会ではごく少数派であり, 『人民文学』という雑誌を発行して, 新日本文学会を乗っ取るうとした」時期に書かれたものである(関根の文章はやや遅い)。

この三つの文章は『人民文学』への批判である。批判の基調は, 政治が文学に優先するという

考え方を許容できないということである。

秋山清の石井立宛ての書簡が遺されている (1953年12月3日, 世田谷文学館寄贈)。

「あなたの手紙にあった新日本文学と人民文学のことは、終始不満のことばかりです。この件を通じて日本の文学者たち (のみならず) の中にまだまだひそんでいる封建的な感情と考え方に大量に出あって、ずいぶん考えさせられました。(その中には私も在り私も又私自身の不満の対象の一つではあります)。」

「対人民文学とのことははじめから今まで文学論としての対立論争が全くといっていいほどないのです。そのようにバカバカしいものであったことを私たちは反省しなければなりません。あなたのいわれる通りです。」

「その当時私たちがそのことに文学者として如何に対処したか、それが不足であったかを文学者として (あるいは文学論としてもっと本気でやればよかったこと) 反省すべき問題ではなかったかと考えます。その点もあなたの指摘のとおりです。もう少し私たち皆がしっかり考えて本気で文学運動ということを考えたら、民主主義文学全体のうけた傷は少なくともすんだかとも考えられます。全体としてはまだまだそのことの傷が深くのこり、ほんとの立直りは容易ではないでしょう。その渦中に在って金 (達寿) 君が“玄海灘”をかいた努力は大へんなことだといえましょう。」

長くなったが、秋山清による重要な指摘と考えられる。

しかし、『祖国の砂』には、人民文学全国編集委員の酒井眞右、福岡人民文学サークルの矢山みつ、『人民文学』に作品を掲載した山崎正和や岩田清などの『人民文学』グループに入ると見られる人たちの詩も載っている。テーマ・内容重視、表現技術重視で、決めていったのだろうか。

最近注目されている『祖国の砂』と『京浜の虹』の対比であるが、『祖国の砂』が『新日本文学』、『京浜の虹』は『人民文学』に、それぞれ依拠するものと見られている。その両者の違いを示したのが、へたくそ詩論争である。

理論社編集部編『京浜の虹 労働者の解放詩集』(理論社, 1952年9月)に関して、「へたくそ詩論争」が展開された。これについて、近年、鳥羽 (2009)、鳥羽 (2010) および鳥羽 (2011) や竹内 (2009) が分析している。最も詳しいのが、鳥羽 (2011) であり、『祖国の砂』との対比において、詳細に両者の性格を分析している。

ただ、触れられていない重要な違いは、『祖国の砂』の詩人たちは全国から掲載されているのに対し、『京浜の虹』の詩人たちは京浜地区に集中していることである。全国各地域を対象としたことは、京浜以外のそれぞれの地域 (例えば、室蘭、秋田、東海地区、大阪、広島、九州など) の有力な詩誌、詩人たちを浮かび上がらせたということである。あるいは、鳥根の高田正七や徳島の合田曠のように、それぞれの地域で独自に詩を作り続けた詩人をも対象にできたということである。

「へたくそ詩論争」は、『京浜の虹』の「編集のことば」が次のような一文から始められている

ことに端を発する。

「これは、詩集とよばれるねうちが、あるものだろうか？ うまい詩、りっぱにととのった詩……そういう詩をあつめるものを詩集とよぶのならば、これは、詩集とはいわれまい。へたくそは、へたくそなりに（中略）ひよっとすると、これは、これまで日本にうまれた、いちばんへたくそな詩集であるかもしれない。」

鳥羽（2010）によれば、この一文および詩集を最初に批判したのは1953年、『大阪文学』に掲載された須藤和光（筆名加藤新五）の文章である（『須藤和光 作品と回想』に再掲されている「へたくそ詩の論理について」）。さらに、鶴見俊輔、加藤新五（須藤）、柏岡浅治の鼎談「詩と思想」（1955）では、「詩人以外の専門家との交流」の第二回として、鶴見俊輔と話し合う機会がもたれていた。この鼎談の加藤の発言の方が言いたいことは明確である。

「詩人がそういうかたち（暮らしのリズム、労働のリズムを自発的に）で詩を書きはじめて、しばらくして何ほどか様式化された詩（「反動政府の魔手」といった類の）にぶつかったとき、よほどのエネルギーがなければその様式のなかへまき込まれてしまうおそれがある。」

「1938年ごろ、プロレタリア詩運動の末期、たとえば船方一、松永浩介、大元清二郎というような人びとが労働者のなかから立ちあらわれて、ぼくなんかにはひじょうにつよい影響をあたえた。戦後彼らがどういのかたちで立ちあらわれるか、興味をもっていたのですが、『京浜の虹』などに発表された松永や船方の詩はくだらないもので、憤慨した。」

「戦後の勤労詩、サークル詩運動のぶつかっている壁は、ヴィジョンを自分の内部に結実させるために欠けている何かだとぼくは思います。」（いずれも加藤新五（須藤）の発言）

しかし、批判された松永浩介は、『須藤和光 作品と回想』において、この須藤の理解を否定する。松永は1952年当時に新日本文学会の中央委員であったことから、松永には須藤のこの指摘が的外れと思われたのである。

「加藤新五と須藤和光が同一人であることがわかったのは何時頃であったか今では思い出せない。」

「『京浜の虹』と『祖国の砂』が1952年刊行されて、へたくそ詩論争が出てきた。」

「『京浜の虹』に就いていえば、この本の製作にあたった人々として、内容の構成と各章のプロオグなどの執筆には小宮山量平があたりました、と出版社の小宮山が書いている。」

重要なのは次の点である。

「編集に協力したことになっている松永と山田今次は持っているサークル誌を提供した程度で編集内容にはタッチしていないのである。」

「私よりひとまわり若い須藤和光の逝去に私はフンガイしている。」

松永が「サークル誌」と言っているのは、『鳩』などと思われる。

1-4 74人の詩人たち

秋山清の『祖国の砂』と『京浜の虹』では、「この仕事（『祖国の砂』）は戦後の記念すべき出来ごとだったという思いもないではない。」と自賛している。

「たとえばその中には次のような人々がいた。押切順三、吉田美千雄、錦米次郎、清水清、井上光晴、松永浩介、山田今次、北本哲三、木暮真人、安藤美紀夫、吉田欣一、えのき・たかし、千早耿一郎、大場康二郎、長沢弘泰、瀬下良夫のように、その多くは『新日文』にかかわるが、また塚本雄作、且原純夫、高橋兼吉、今井朝二、いくみ・のぶる、石垣りんたちのように、——無名詩人のなかからすぐれた無名詩人として紹介し得たという思いは今も尽きない。」

さらには、個々の詩を取り上げ、上記以外に眞貝欽三の「眼鏡について」、蛭間裕人の「品川風景」なども取り上げる。次の竹内（2009）、鳥羽（2011）と重なっている詩人は多いが、秋山の指摘では谷川雁と山崎正和は入っていない。

竹内（2009）は、『祖国の砂』を次のように紹介している。

「当時としては無名であった詩人たち74人による詩が掲載されたこの詩集には、たとえば、現在よく知られている、石垣りんの「私の前にある鍋とお釜と燃ゆる火と」などが収録されている。ほかにも、目立ったところをあげれば、押切順三、吉田美千雄、錦米次郎、清水清、井上光晴、松永浩介、吉田欣一、えのき・たかし、千早耿一郎、谷川雁、且原純夫らの詩が収められている。また、当時、京都大学在学中の山崎正和、安藤美紀夫といった人たちの詩も収録されていた。巻末には74人の作者紹介があり、さらに秋山清と中野重治が解説を書いているが、その解説によれば、本書の詩は、各地のサークル誌に掲載されたおよそ3000編の詩のなかから選ばれたという。」

鳥羽（2011）では、次の通りである。

「『日本無名詩集』の副題通り、ほとんどの詩人は無名もしくは忘れられた存在であるが、その中で井上光晴と谷川雁の名前がひとときわ目を惹く。この時点で谷川は無名詩人のカテゴリーに入るかもしれないが、井上を同じように扱うのは無理があるだろう。」

その根拠として、「書かれざる一章」をめぐる事情などを挙げる。さらに

「他の詩人たちも全く無名の人々ばかりではない。竹内（2009）も指摘していた通り、『祖国の砂』にはこの二人の他にも押切順三、吉田美千雄、錦米次郎、清水清、松永浩介、吉田欣一、えのき・たかし、千早耿一郎、且原純夫らに加え、京大生時代の山崎正和、同じく京大生で後に児童文学作家になる安藤美紀夫、『銀行員の詩集』などから有名になっていく石垣りんも寄稿していた。」

そして「『祖国の砂』と『京浜の虹』の両方の詩集に収録されているのは松永浩介、山田今次、浜田矯太郎、千原久仁子の4名のみであり、（千原を除く）3名は「プロレタリア詩運動時代からの指導的な詩人」（松永浩介）、「専門詩人」（山田今次、浜田矯太郎）のリストにほぼ重なるのだ。」

としている。

『祖国の砂』の作者紹介によれば、松永(当時45歳)、山田(当時39歳)、浜田(当時31歳)はいずれも横浜市在住である。道場(2016)によれば、松永、山田らは「1946年に結成された「京浜労働文化同盟」に参加した戦前来の活動家」である。ただ、前述したように、だからといって、松永浩介や山田今次が、『京浜の虹』の刊行に積極的に関わった事実はないようだ。松永は『鳩』などの詩誌を貸しただけだという。

竹内と鳥羽が取り上げた「目立った」詩人14人は共通している。井上光晴が「無名」の範囲に入るか、は議論の余地があるが、先行研究では、この14人が『祖国の砂』の代表的存在と考えられているのである。

しかし、本稿は、14人に絞るのではなく、74人の詩人全員を対象として考えていきたい。「目立たない」人びとにも、とても魅力的な存在が多いからである。また、74人の背景には、当時の様々な、重要な課題、テーマがある。この時期の大事なテーマはほぼ網羅されているのではないだろうかと思えるほどである。以下、一人一人ごとに情報、材料すなわち詩人の書いた文章、詩人について書かれた文章を収集し、それぞれの人びとの背景にあるテーマについて検討していく。

まず、74人の詩人たちを、1952年8月における年齢順に並べてみた。なぜならば、年代ごとに、その経験に大きな違いがあるからである。なお、逝去者3名は除いた。最年長の45歳の松永浩介から最年少の18歳の山崎正和まで幅広い。また、ABCおよび「」は、本稿でのグループ分けを示している。

年代ごとの大きな違いは兵役である。日中戦争・太平洋戦争に従軍したかどうかである。例えば、28歳の谷川雁は兵役に就いているが、26歳の井上光晴は兵役に就いていない。同じ26歳でも、つぎか・もといは徴兵忌避で逃亡している。一方、同じ26歳の草階俊雄は兵役に就いている。徴兵検査年齢は、1943年には満19歳(1924年生まれ)、1944年には満18歳(1926年生まれ)に引き下げられた。4-5月に検査、翌年1月入隊である。1926年4月生まれまでは、1944年4-5月に検査を受け、1945年1月に入隊していると考えられる。一番微妙なのは井上光晴で、1926年5月生まれで、1945年2月に佐世保で検査は受け、「入営命令書をうけたが(?)、入営まえに敗戦となった」とされている。

そして、かなり多くの人びとが、兵役で外地に赴き、戦後復員している。また、主に満州から引き揚げた者も、女性を含めて多い。掲載詩には、兵役、引揚の経験に基づいて書かれた詩が多い。そこで以下、情報が得られた範囲で、兵役・引揚などの経験を記した。ただし、記入のない人びとは、兵役・引揚の経験がないのではなく、情報が得られていないと考えてもらいたい。

45 歳

松永浩介 A-1 「地域リーダー」兵役（ニューギニア・インドネシア）

44 歳

柴村羊五 B-3 「ベテラン」満鉄調査部, 引揚

岩田清 B-6 「ベテラン」結核で療養

43 歳

ふじの・きくはる A-6 「地域リーダー」

39 歳

山田今次 A-2 「地域リーダー」

北本哲三 C-1 「農民」

38 歳

錦米次郎 A-10 「地域リーダー」兵役（ベトナム）

高田正七 C-2 「農民」兵役（満州）

塚本雄作 A-7 「地域リーダー」

高橋兼吉 H-2 「国鉄」

内田豊清 A-11 「地域リーダー」

瀬下良夫 B-5 「ベテラン」兵役（ビルマ・国内）

37 歳

久保文子 B-9 「ベテラン」

36 歳

木暮真人 B-2 「ベテラン」兵役（満州）

吉田欣一 A-9 「地域リーダー」

鈴木豊久 G-2 「銀行員」

35 歳

清水清 A-3 「地域リーダー」兵役（台湾）

千原久仁子 B-1 「ベテラン」

34歳

吉田美千雄 A-5 「地域リーダー」兵役
眞貝欽三 H-3 「国鉄」

33歳

押切順三 A-4 「地域リーダー」兵役 (中国山西省)
酒井眞右 A-12 「地域リーダー」
長沼静人 C-3 「農民」兵役 (千島)
合田曠 B-7 「ベテラン」兵役 (ビルマ)
矢山みつ K-1 「九州」引揚 (満州)
大場康二郎 K-2 「九州」

32歳

北村篤 B-10 「ベテラン」
大木静雄 B-8 「ベテラン」
池田藤子 D-2 「女性」
長沢弘泰 B-4 「ベテラン」兵役 (2か月にて兵役免除)
石垣りん G-4 「銀行員」(1920年生まれ)

31歳

えのき・たかし A-8 「地域リーダー」兵役・軍属 (中国山西省)
榎本満 H-5 「国鉄」兵役 (モンゴル, 中国北部, 国内)
浜田矯太郎 I-4 「工場労働者」兵役 (場所不明)

30歳

千早耿一郎 G-1 「銀行員」兵役 (中国)

29歳

大場豊吉 J-2 「北海道」兵役 (国内)

28歳

谷川雁 K-4 「九州」兵役 (国内)

27 歳

今井朝二	H-4 「国鉄」
飯村亀次	H-6 「国鉄」
小島義正	B-11 「ベテラン」

26 歳

村岡真知子	D-8 「女性」引揚（満州）
近江てるえ	D-7 「女性」
川口しげ子	D-4 「女性」
細川洋子	D-5 「女性」

1925 - 1926 年生れが分岐点である。生年月日順に見てみよう。

伊藤習司	J-1 「北海道」	1925 年 7 月 16 日生	兵役不明
はさま・にん	F-4 「教員」	1925 年 9 月 17 日生	兵役不明
草階俊雄	E-6 「学生」	1925 年 9 月 23 日生	兵役
柳原真佐夫	F-5 「教員等」	1926 年 2 月 7 日生	兵役不明
つさか・もとい	H-7 「国鉄等」	1926 年 2 月 16 日生	兵役忌避, 引揚（朝鮮）
井上光晴	K-3 「九州」	1926 年 5 月 15 日生	兵役就かず

25 歳 これより若い世代は兵役に就いていない。

加能徹	F-2 「教員」
柏岡浅治	H-1 「国鉄」

24 歳

石田良雄	F-3 「教員」
矢島章	I-1 「工場労働者」
久保田俊夫	J-3 「北海道」
生石保	J-4 「北海道」
かさい・まさる	J-5 「北海道」
なかむら・やすし	I-3 「工場労働者」

23歳

樋口昭子	D-6 「女性」
李錦玉	L-1 「在日朝鮮人」
いくみ・のぶる	G-3 「銀行員」
且原純夫	N-1 「作者紹介未掲載」(1929年生れ)

22歳

安藤美紀夫	E-4 「学生」
岩井美沙夫	F-1 「教員」

21歳

蛭間裕人	E-5 「学生」
棲井袖子	D-1 「女性」
輪島努	I-2 「工場労働者」
雨宮杉夫	E-1 「学生」引揚(台湾)

20歳

武内笛美	D-3 「女性」
------	----------

19歳

滝川貞夫	E-3 「学生」
------	----------

18歳

山崎正和	E-2 「学生」引揚(満州)
------	----------------

1-5 全国の詩誌

『祖国の砂』には、全国の詩誌・同人誌・機関誌その他主要のものが都道府県別に紹介されている。その背後には、詩誌等を発行しようとする集団あるいはサークルが存在しているのである。それらは、地域単位の場合もあれば、職域単位の場合もある。

表は『祖国の砂』236-238頁に紹介されている全国の詩誌名を都道府県順にし、詩人および関係誌と対応させたものである。なお、掲載されていない県もある。以下『祖国の砂』掲載詩人72名の名前の後ろのかっこ内は作者紹介に掲載された関係誌名である。『祖国の砂』の作者紹介に掲載されていない且原純夫と、逝去しており、在住地が書かれていない落合みどりは入れていない。詩誌の概要については、紅野・栗坪・保昌・小野寺(1977)、和田・杉浦編(2007-2009)、中村(2014)、志賀(2008)、志賀(2015)などを参照している。

表 都道府県別関係詩誌および紹介詩誌

都道府県名	詩人 (関係誌名)	『祖国の砂』に紹介されている詩誌等
東京	清水清, 木暮真人 (コスモス), 柴村羊五, 近江てるえ, 千原久仁子 (文芸首都, 鳩 (神奈川)), 千早耿一郎 (コスモス, 群), 蛭間裕人 (うしお, みちしるべ), 高田芳枝 (死去, 新詩派, 新日本詩人), 大場康二郎 (S 港通信 (長崎)), 雨宮杉夫, 三枝源七 (死去), つぎか・もとい (民芸通信 (埼玉)), 進路, どんぐり), 鈴木豊久, 李錦玉 (新日本文学), 長沢弘泰, 岩田清 (中電文学), いくみ・のぶる (群), 石垣りん	群, 逆光, 列島, トロイカ, アルビレオ, 人民文学, 葦, 新日本文学, 勤労者文学, 呼子, 国鉄詩人, 道路, 文学芸術, 民情通信, 新日本詩人, 零度, ポエム, コスモス, 詩行動, 魚紋, 文学サークル, 詩想, たかなり, 針晶, 日通文学, 現代詩研究, 角笛, 歌ごえ, 北多摩文学, 新表現, 羞恥, 群青, えんとつ, うしお, 犀, 千代田, 下丸子, あらし, 新樹
神奈川	松永浩介 (鳩, 鍛冶屋), 山田今次 (新日本文学, 鳩), 矢島章 (新日本文学, 文学芸術 (東京), 岬), 川口しげ子, 瀬下良夫, 浜田矯太郎 (新日本文学), 細川洋子 (世代 (埼玉))	海市, 鳩, 第一書, 岬, 行動, 鍛冶屋, ひとみ, 厚木文学, 風彩, ちかい, シュエヌ, いすゞ文芸, 小向文学, 詩と版画, 神奈川文学, 下茅ヶ崎文学, ほのほ, 日産文学, 鶴鉄文学, 湘南文学, 壁光, 序章, 詩の家, 京浜作家
千葉	大木静雄 (アフランシ), 榎井袖子, 飯村亀次 (新日本詩人 (東京), 詩生活)	詩精神, 詩とリズム
埼玉	武内笛美 (民芸通信, 詩と詩人 (新潟), 宇宙船), 池田藤子 (民芸通信)	民芸通信, 世代, 宇宙船, 秩父文学
茨城		みかん, 文芸通信 (文芸通信の会 水戸市), 紅い花
栃木	小島義正 (とちぎ詩人)	芳賀文学通信, とちぎ詩人 (とちぎ詩の会 栃木上都賀郡)
群馬	酒井眞石 (新日本文学, 人民文学, 群馬勤労者集団)	青猫
北海道	吉田美千雄 (新日本文学, 葦会列島 (東京), 詩と詩人 (新潟), コスモス等), 久保田俊夫 (北方詩人, 木星, 壁, 詩と詩人 (新潟)), 伊藤習司 (新日本文学, 北方詩人, 壁, 鏑 (兵庫)), 生石保 (北方詩人, 新日本文学, 詩と詩人 (新潟), 列島 (東京), 後志文芸), かさい・まさる, 大場豊吉 (新日本文学)	風便, 北方詩人, 壁, 釧路文学, 氷点, 火山脈
秋田	押切順三 (処女地帯), 北本哲三 (処女地帯), 草階俊雄 (相模文学, 出身地), 柳原真砂夫 (詩学, ハンイ)	処女地帯, ハンイ (半夷)
岩手	岩井美沙夫 (新日本文学, 北流, 北原, 文学系, 雑文クラブ)	
宮城		東北詩歌, 文芸シオガマ
山形	高橋兼吉 (詩人会議, 索座, 秋鉄詩人)	
福島		北方の灯
新潟	眞貝欽三 (新鉄詩人, 国鉄詩人 (東京), 詩作工場), 今井朝二 (うらぶれた海底に黄色い花が咲いたら)	新鉄詩人, うらぶれた海底に黄色い花が咲いたら
静岡	塚本雄作 (新日本文学, 東海作家)	東海作家, 詩神, 毒針, 虹 (熱海文学サークル 熱海市)
山梨		中央山脈
長野	長沼静人	新詩人
愛知	えのき・たかし (東海作家 (静岡), 冬の日, 若潮, 口笛)	新文学路 (新文学路の会 名古屋市)
富山		新日本海文学 (新日本文学会富山支部)

都道府県名	詩人(関係誌名)	『祖国の砂』に紹介されている詩誌等
石川	石田良雄(天童), 加能徹(天童), 樋口昭子(驢馬, 石川詩人)	石川詩人
福井		ゆきのした(新日本文学会福井支部)
岐阜	吉田欣一(新日本文学, 東海作家(静岡), 岐阜文学, らんぶ)	岐阜詩人
三重	錦米次郎(コスモス, 詩と詩人(新潟), 三重詩人), 北村篤(三重詩人)	三重詩人
奈良		歴心
和歌山	滝川貞夫(紀南文学, 新日本文学, 出身地), 榎本満(紀南文学)	紀南文学
大阪	なかむら・やすし(らんぶ, 働く人の詩, 夜の詩会), 柏岡浅治(交替詩派)	交替詩派, 働く人の詩, ほえとろ, 現代詩, 新芽, 詩文化
京都	山崎正和(人民文学), 安藤美紀夫(コスモス)	ゴルボワ, 花東
兵庫	輪島努(美翠), 内田豊清(詩と詩人(新潟), 鏑(編集人))	土曜詩人, イオム, 港詩人クラブ, 鏑, 処女地, 阪神文学
岡山	久保文子(新日本文学, くるまざ)	詩作, 岡鉄詩人, くるまざ
広島		高原, わかば, 春陽, われらの詩
山口	村岡真知子(萩文学), ふじの・きくはる(新日本文学, 萩文学, 海燕(福岡))	萩文学(新日本文学会萩支部), 文芸風土, ストルア
島根	高田正七	
徳島	合田曠(蘇鉄)	近代詩人
福岡	矢山みつ(平和のうたごえ, 福岡人民文学サークル)	ぜんりょう, たかまつ, あしおと, 海峡, 前進, 海燕
大分	はさま・にん(母音(福岡))	ゲルニカ
長崎	井上光晴(新日本文学)	文学S港
熊本	谷川雁(母音(福岡), 角笛(東京), 九州文学(福岡))	新熊本文学(新日本文学会熊本支部)

注: 奈良の「歴心」は、大阪の「暦心」の誤りだと考えられるが、確認できていない。

注

- (1) 本稿は、これまで発表してきた著者の研究の二つの分野にまたがったものである。一つは、著者の父、石井立と戦後文学についてのシリーズである。特に、石井耕他(2010)が本稿と直接関わっている。もう一つは、戦後から高度経済成長期についてのシリーズである。石井(2015)、石井(2016)が本稿と直接関わっている。
- (2) 石井立は、1923年生れ、弘前高等学校、京都帝国大学文学部西洋史学専攻、1947年6月筑摩書房に入社した。筑摩書房の編集者として、井伏鱒二選集や太宰治の『人間失格』の編集を担当し、中島敦全集、小熊秀雄詩集、坂口安吾『信長』も手がけた。壺井栄作品集、佐多稲子作品集をまとめあげ、小山清とともに同人誌『木靴』を発刊する間柄であった。石井立は、戦中に肺結核を患い、1964年心不全によって40歳で死去した。

筆者たちは、遺された石井立の所蔵資料を整理しつつあり、これまで世田谷文学館、裕伊之助美術館、神奈川近代文学館、北海道立文学館、三鷹市スポーツと文化財団などに資料を寄贈・寄託などしている。また、それぞれの学芸員の皆さんによって、一部資料が公開・展示、あるいは研究成果が公表されている。

- (3) 『祖国の砂』には、数か所の誤りがあることが、作者紹介アンケートとの照合によって、明らかになっている。本稿では、それらを修正している。
- (4) 現在では、井上光晴、谷川雁、石垣りん、山崎正和の著書あるいは関連する本はたくさん出版されている。そこで本稿では、この四人にはあまり重点を置かず、他の現在でも無名の人びとを中心に記述した。
- (5) 本稿は、四回の連載の予定である。参考文献は、連載の最後に紹介する。